

随心院蔵仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

花野憲道

目次

一、序

二、書誌

三、随心院本の内容

——永観作『往生講式』との関連から——

四、国語史研究資料としての価値

一、序

随心院（京都市山科区小野）は平安時代中期・仁海僧正により開創せられ、牛皮山曼荼羅寺と称する由緒深き梵刹である。⁽¹⁾法流小野六流の内、随心院流（随流）の本山でもある。

随心院の経蔵は境内東奥に在り数多くの聖教が伝えられているが、その全容は未だ十分には知られていない。しかし、過去に数度の調査が行なわれた事が各聖教箱の張紙により伺い知ることが出来る。⁽²⁾

その経蔵に鎌倉時代中期文永六（一二六九）年書写になる『往生講式』一卷がある。「往生講式」は平安時代後期承暦三（一一〇七九）年に南都三論宗の永観によって作られた「講式」である。⁽³⁾

本資料は、所謂「仮名書き」であり、その書風は優雅で気品を保ちつつ、豊潤流麗な筆蹟で、しかも大部分の漢字に振り仮名が施されている。それらは国語史・佛教史・書道史等の諸学に亘つて有益な研究資料である。更に管見によれば、仮名書き佛典としては書写年代の明確な資料であり、現在知られているものうちでは最古の写本である。そのことは、本資料が鎌倉中期仮名書き佛典の規範的なものになり得ると考えられ、価値も今後一層高まつていくであろうと考えるものである。

随心院には講式資料として、本資料以外に次の様な資料を蔵していることが現在までに確認された。

普賢講作法 一卷、院政初期書写(ヲコト点・ニトハカ点)

往生講式 一卷、鎌倉後期書写

舍利講式 一卷、鎌倉後期(元亨二年)書写

涅槃講式 一卷、鎌倉後期書写

佛生講式 一卷、室町初期書写

舍利講式 一卷、室町中期(寛正七年)書写

今回、随心院当局の格別の允許を得て、全巻の影印・並びにその翻刻を公にする機に恵まれたことは、誠に慶ばしいことである。

ここに本資料の概要に就て概説し、聊か私見を述べてみようとするものである。

二、書誌

随心院蔵文永本仮名書き『往生講式』は、雲母引き斐紙を料紙に用い、表紙は無く、全十七紙を継いだ卷子本である。軸木はなく、軸に相当する部分の料紙は汚れて変色している。第一紙の紙背に仮名書き本文(以下、本文と云う)とは別

筆で、外題「往生講式 文永年中ノ筆」と墨書きされている。墨界を施し、紙高二十七・四糎、界高二十二・四糎、界幅二・五糎、朱印等は存しない。本文の漢字全体にわたつて墨筆で書かれた字音と和訓との片仮名が詳密に施されており、これが本文と同筆で書かれている。又、処々の漢字に声点が施されている。本文の書写状況は、「講式」の表白段と第一段の初め(2く25)迄が漢文体で書かれ、以後は卷末の奥書(38)までが漢字平仮名交り文で書かれている。裏打補修は部分的に施されているが、虫損も甚だしく後述の如く料紙の闕落も存する。

本資料の奥書・識語は次の如くである。

(奥書)

「文永六年五月廿二日 とりのおはりにこのしきかきをはりぬ かならずく、一佛浄土の縁をむすはんとなり」

(識語)

「しつかにこの式を拜覧申候に ほんふのつたなき事をのべかく時は いよくしやはをいとひ 仏の難有躰かたる

時は 猶々浄土をねかひ候や ねかわくは此式拜見之力をもつて すみやかに九品のはちすの上に生まれむ

南無阿みた仏くく 仏子尊然(花押)

(別筆)

「南都興福寺東院之内 藤菊丸」

識語にみられる「仏子尊然」「藤菊丸」なる人物に関しては未勘である。只、肥前高城寺文書「明尊所職等讓状案」⁽⁴⁾に「忠光房尊然」とあるが、本資料の尊然と同定する確証を得るに到らない。

本資料の料紙各々の紙幅は次の通りである。

第一紙 ……五十四・三糎

第二紙 ……七・七糎

第三紙 …… 四十六・八輝

第四紙

～ …… 各紙五十四・三輝

第十六紙

第十七紙 …… 十八・三輝

本書には料紙の剝離闕落が認められる。特に176・177行の間に於ては、料紙約二枚分が闕落している。この部分は『往生講式』第四段の前半より第四段の佛陀・礼拝誦を加えて第五段の発句まで至り、『大正新修大藏經』所収の往生講式と対照すれば実に二十八行にも及んでいる。この闕落部分の料紙の継目に小紙片を挿み、そこには次の如く注記されている。

「をしるかな此次目より第四段ノ中半乃第五段ノ始落ス」

本資料は四種類（四度）の筆によつて、構成されていると考えられる。

1、本文と奥書（26～328）、本文漢字に付せられた仮名・声点（182・255等）。

2、漢文表記部（2～25）、**(a)**声点（181・249等）、**(b)**句切り点（185・196等）、**(c)**仮名に付せられた片仮名（40・83等）。

3、識語（330～336）。

4、巻首と巻末の各一行（1・337）。

此等四筆と、第二・第三紙が他の料紙より短い事と、合わせて考えてみると次のようにならうか。

先ず1の本文を詳細に見ると、別筆を加えたと思われる箇所がいくつか散見される（翻刻にそのつど示した）。

① 声点……巖・寒・（34） 覺・雁（18）等

② 句点……光曜・らむ・けいを・みかく（196）等

随心院藏仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

⑧ 右傍の片仮名……いえともモ(12)等

①は本文漢字に付された声点に重ねて付加したものである。②の点は特定な部分に集中して付されており、読誦の場合の句切りとも考え難く、今の所未詳とせざるを得ない。③は誤読の生じ易い平仮名を片仮名にて補ったり、又補読を加えたものである。

これらの筆は2の筆と同筆である。一方、1でありながら、平仮名に片仮名を付したところが認められる。

ゑエ(238)

この箇所は漢字表記すれば「得」であり仮名は本行の「ゑ」ではなく、ルビの「エ」が正用である。

2、この筆により書写された本文は第一紙と第二紙である。又、第二紙と第三紙とを加えると、その他の料紙と同じ紙幅になる。そこで次のように考察される。

a、原初形態の文永本

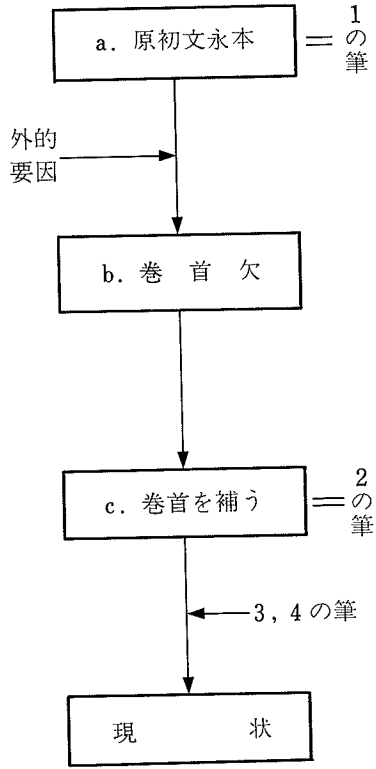
b、外的要因(何らかの理由で巻首が汚れ、或いは焼失⁽⁵⁾)で本文の読誦が困難になる。

c、同一の料紙で第一紙を補い、不足の紙片を第二紙として付加した。更に、漢文体が仮名書き体に極端に変化しない様に第25行にて順次移行させていった。又、仮名字体は1の仮名とも大きな相違はなく、本文書写後余り下らない頃のものと思われる。

3、30より料紙が離れているが、文意より散逸は無いものと考えられる。

4、内題より外側に墨書されている事から当然最後の筆であろう。

従って、1〜4の順に筆が加わり、最終的に現在の姿を留めたと考えられる。



又、本文の書写人は不詳であるが、4の加筆時には南都興福寺のもとにあった。当時、南都と小野や醍醐との交流は周知の通りであり、それらの機会に随心院へ移動したのであろう。

三、随心院本の内容

―永観作『往生構式』との関連から―

『往生講式』の原作者永観（長元六（一〇三三）年〜天永二（一一一一）年）に就ては『真言伝』『本朝高僧伝』『私聚百因縁集』『拾遺往生伝』などに詳しく説かれている。永観は文章博士源経国の子で、十一歳（一説には八歳）のときに洛東禅林寺（後に永観堂と称せられる）の深観について剃髪し、次いで南都東大寺戒壇に登り具足戒を受け、有慶について三論を究め法相・華嚴にも通じた。四十歳の時、禅林寺の一隅に東南院を営み、合せて浄土念佛を勧進し浄土教の先駆者として知られ、一生を通じて頭密の行業を重ねた人である。

ところで、平安時代の中期、阿弥陀信仰と共に浄土教の隆盛にともない恵心僧都源信（九四二—一〇一七）によって『往生要集』が著されたのは、『往生講式』成立より約一世紀を遡る永観（八九五）年四月である。そこには浄土念佛の正しい在り方を示し、西方願生・浄土往生を願う当時の人々への正しい念佛のあり方を指導している。それは源信没後まもなく始まる末法思想の意識の高まりも伴い、多くの人々に読まれ広く流布し、文学作品・絵画・建築など多方面に重要な影響を及ぼした。永観作『往生講式』（承暦三—一〇七九）年）もその一つであったことはいうまでもない。『往生講式』は、そのような社会情勢の中にあつて、欣求浄土の信仰と来迎引接を願ひ編まれたものである。

『往生講式』が講会として修せられ、又、一般にも広く流行し勤められていたことは『沙石集』『私聚百因縁集』などにより窺われる。原作者永観自らが修したことは、次のように記されている。

「又新造式。毎十齋日。勤修往生講……十月晦日。如例修往生講……同二日。令修往生講。至于念佛往生之段。講衆等異口同音。唱来迎讚。」
（拾遺往生伝巻下）

「天承二年八月比ヨリ。病身ヲカス。十月晦日例ノ如ク往生講ヲ修ス。……同十一月二日。又往生講ヲ修ス。」

（真言傳巻第七）

同時に音楽法要の形式を当時既に用いている。

「以此曲。毎月十五日。招伶人五六。勤修於講演。号曰往生講矣。專宮此事。漸及多年。」

（拾遺往生伝巻下）

『往生講式』は表白段に記されている如く、毎月十五日に西壁に奉安した阿弥陀如来迎接像の宝前に於て、西方極楽往生の講説を行ない、釈迦牟尼佛を礼拝讚歎して、その大慈恩に報謝しようとする往生講会の作法を記したものである。その本文内容は、佛前に香花燈明を献じ、伝供（奠供）の歌頌「若人散乱心 乃至以一花 供養於画像 漸見無量佛」を唱えて着座法要を修し、以下一座七門を説く式を唱えるものである。

その七門とは、①発菩提心門 ②懺悔業障門 ③随喜善根門 ④念佛往生門 ⑤讚歎極楽門 ⑥因圓果滿門 ⑦廻向功

〈図2〉

④	③		②	①	
324	158	157	94	5	行数
我等与衆生 願以此功德 普及於一切 皆共成佛道	願共諸衆生 往生安樂國	若人無善本 不得聞此經 清淨有戒者 乃獲聞正法	懺悔の法にあえり おのゝく三業に：	若人散乱心 乃至以一華 供養於畫像 漸見無量佛	隨心院本
同發菩提心 往生安樂國	願共諸衆生 往生安樂國 ^二 反	若人無善本 不得聞此經 清淨有戒者 乃獲聞正法 『曾更見世尊 則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜』	各三業： 『始 ^レ 自 ^ニ 無始罪障 ^一 。皆悉可 ^ニ 懺悔 ^一 。但業障年深懺悔日淺』	幸今值 ^ニ 大乘懺悔法 ^一 『一切諸菩薩 各齋天妙華 寶香無價衣 供養無量佛 咸然奏天樂 暢發和雅音 歌歎最勝尊 供養無量佛』 若人散乱心 乃至以一華 供養於畫像 漸見無量佛	大正藏經本

『内の句が、大正藏經本に加えられている』

徳門であり、各門每一段を構成している。各門(段)の終りに伽陀(梵語 *gāthā* の音写)を付し、続いて礼拝の句「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀佛」を三礼十念する。七段を修した後、更に一段を加えて、釈尊の遺教とその広大な恩徳に謝するが為に讚歎礼拝し往生極樂の成就を願はんことを述べ、最後に廻向の句「願以此功德 普及於一切 我等与众生 皆共成佛道」で結んでいる。

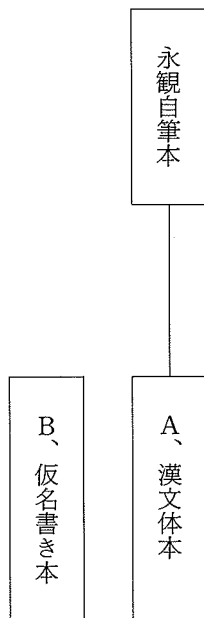
さて、『往生講式』を翻刻した代表的文献として『大正新修大蔵經 第八十四卷』がある。今、本資料と大正新修大蔵經所収本(以下、大正蔵本という)とを比較すると、先の翻刻注記以外に図2に示したような相違点が認められる。

④は「廻向の句」である。本資料で使用されているものは「妙法蓮華經化城喻品第七」の偈文であるが、大正蔵經本のそれは「觀經玄義分第一」の偈文であり、より浄土教的色彩の濃い句となっている。

次に本資料の成立と、それが仮名書きであることについて考えてみたい。

「講式」は「語る声明」といわれる如く、式師が独唱する声明であり、法会に参列した大衆が唱和斉唱する性格のものではない。大衆は法会に参列し、式師の唱える講式を聞き、感動し、落涙し、哀歎し、恋慕渴仰の想を凝らして見佛聞法の法悦を味わうのである。

ところで、平安後期に編まれた永観自筆の『往生講式』は当然漢文体であり、それを唱えるに当って節博士は必要なかったであろう。しかし、漢文体『往生講式』には節博士を加えた写本もいくつか伝来しており、『往生講式』は図3の様
様に二つのルートで書写使用されたと考えられる。



A、漢文体で節博士を付したものを含む。

これは実際に法会に於て「語る声明」のテキストとして使用したものである。

B、仮名書きのもの。

さて、現在迄に仮名書き佛典として紹介されているものは次の通りである。

- ①、仮名書き往生講式 文永六年写、随心院蔵（本資料）。
- ②、妙一本仮名書き法華経 妙一記念館蔵。（中田祝夫編、霊友会・昭63年）。
- ③、足利本仮名書き法華経 元徳二年写、饒阿寺蔵。（中田祝夫編、勉誠社・昭49年）。
- ④、仮名書き往生講式 京都国立博物館蔵。
- ⑤、仮名書き法華経（二巻） 京都国立博物館蔵。
- ⑥、仮名書き観無量寿経 （中田祝夫編、勉誠社・昭53年）。
- ⑦、仮名書き阿弥陀経 （中田祝夫編、勉誠社・昭53年）。
- ⑧、仮名書き観無量寿経 知恩院蔵。⁽⁸⁾
- ⑨、仮名書き往生講式 明応二年書写。⁽⁹⁾

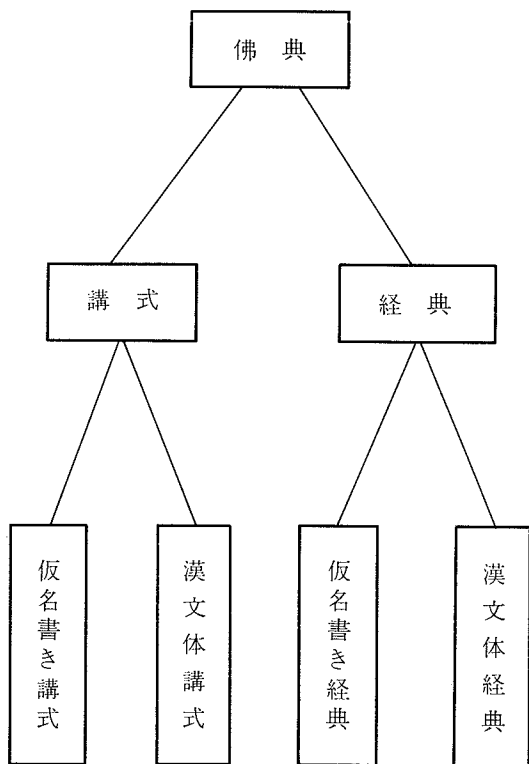
随心院蔵仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

全九点の内、經典以外では「往生講式」が三点も存することには、大きな意味があると考えられる。仮名書き經典に就ては、中田祝夫氏の御高論があるので、ここでは仮名書き講式という事に注目しておきたい。

先にも述べたように、本来講式は佛前で式師が唱えるものであるが、本資料にはその事実を示す事柄(博士、調子や旋律様式の表示)がなく、声点は一部分のみで句切り点も統一性が無い。この特徴は④の資料についても同様であり、更に④では、伽陀が省略されたり、礼拝の句も大部分略されている。

従って、今後の研究課題としては、図4に示す様な分類をなし、個別に検討していく必要がある。

〈図4〉



四、国語史研究資料としての価値

随心院本仮名書き『往生講式』には、全巻に互り漢字に鎌倉中期の片仮名の字音と和訓のルビが、大部分本文と同筆で詳密に施されている。更に仮名書きの箇所就ても、漢字音の平仮名表記がみられる。これらの事象の性格を検討し、本資料が内包している国語史的価値について述べてみたい。

(1) 表記上の特色

先ず一見して明らかなのは、本文全三百二十四行のうち、前半部二十数行が漢文であり引き続き漢字交り平仮名文へと移行するという表記形態である。この要因に関しては先に指摘した通りである。

本書の大部分を占める本文(漢字交り平仮名文)について、A、漢字表記語 B、平仮名表記語と二つに分類して検討してみる。

A、漢字表記語

本資料全八段の各段末部の頌(伽陀)と礼拝の句を除き、漢字表記されている語としては、概ね次の様に類別される(以下、事例は全てを掲げることをしてない)。

① 佛教用語

- 餓鬼(26) 輪廻(28) 三途(54) 菩提(56) 寶珠(61) 法界(65) 彌陀(73) 讚嘆(75) 転法輪(237)
頓證菩提(103) 坐禪入定(208) 上品蓮臺(214) 見佛聞法(215)

② 数を示す語

- 第二(80) 一日一夜(85) 八億四千万(85) 無量億却(122) 無量阿僧祇(134) 四十八願(168) 第十八願
(169) 八万四千(233)

⑧ 一般名詞

鶯雁ウヱガシ (181) 鴛鴦エンオウ (182) 宮殿クツデン (183) 黄金ワウゴン (184) 簫セウ (196) 笛チヤウ (196) 琴キム (196) 箏篋クコ (196) 琵琶ヒハ (197) 鏡ネウ (197)
 満月マンゲツ (229) 音楽オンガク (231)

B、平仮名表記語

③ うれえ (26) しつみ (26) かなしみ (27) あひたに (28) もとむる (33) しかるを (33) たまく (36)
 いかにいはんや (39) さいはる (93) かくのこことく (88) こかね (190)

以上の様に、漢字表記語と平仮名表記語とを比較してみれば、一見して漢字表記語は字音語であり、一方、平仮名表記語は和語であるという原則の存したことがわかる。この傾向は「妙一本仮名書き法華経」と共通する性格であることも一言しておきたい。

更に、漢字表記語に付せられた仮名についてみれば、次のように分類出来る。

⑨ 異音のもの

飢饉ケコシ (26) 東西トウサイ (35) 菩提ホダイ (56) 命終メイシュウ (71) 流布ルフ (126) 女人ニヨニン (129) 修行シュキヤウ (137) 宮殿クツデン (183) 黄金ワウゴン (212)
 白毫ヒヤクマウ (222) 金山コンゼン (226)

⑩ 漢音のもの

経営ケイエイ (35) 万事マンシ (43) 明珠メイシュ (63) 馨香ケイキヤウ (180) 琴キン (196) 落花ラクカワ (203) 鐘シヨウ (254) 断金タンキム (256) 万象マンシヤウ (289) 秋シュ (294)

但し、本資料には右に示した字音＝漢字表記、和語＝平仮名表記の原則から外れるものがいくつか認められる。

⑪ 仮名書き字音語

えむ (143) きうり (146) らむけい (196) 留り (201) かく (214) きくいく (253) みた (272) ねはん (286) く

とく(288) りやく(309)

㊦ 和語の漢字表記語

聲(15) わか國(170) 花の色(181) 池(181) 臺(192) 林(201) あか月(214) 秋(221) 春(222) 星(229)

月(270) 海(289)

㊧のそれぞれの語彙が何故に仮名書きされ、㊦のそれぞれの語彙が何故に漢字表記されたか、という問題については未だ明らかにし得ないが、一つには、此等の語彙が当時に於いて相當に日常的な用語であつたのではないか、という解釈が成り立ち得るかと思われる。

次に、声点を付した漢字に注目してみる。概して漢音読みの声調を示していることが知られる。各語彙の下に韻鏡の声調を「」で示した。

敵^{ケツ}〔平〕寒^{カン}〔平〕(34) 野^ノ外^{ガイ}〔去〕(48) 終^{シュウ}〔平〕焉^{エン}〔平〕(73) 馨^{ケイ}〔平〕香^{キヤウ}〔平〕(180) 重^{ジュウ}〔平〕(183)
鐘^{シヨウ}〔平〕愛^{アイ}〔去〕(254) 秋^{シュウ}〔平〕月^{ゲツ}〔入〕(254) 泥^ヂ〔平〕(265) 大^{ダイ}〔去〕虚^{キョ}〔平〕(285)

但し、次の一例は例外的である。

至^シ〔去〕考^{カウ}〔上〕(254)

(2) 訓点の時代性

本資料は文永六年に書写されたものであるが、その鎌倉時代中期という時代性を反映している事象を、いくつか指摘することが出来る。

a、片仮名の字体

本資料所用の片仮名字体は次の如く帰納せられる。

(片仮名字体表)

字隔	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
モウ	ン レ	ワ	ラ	ヤ	マ テ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
		キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		キ 井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ ハキ	イ
			ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
			ル	ユ	ム	フ		ツ	ス	ク	ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
	エ ヱ	シ		メ	ヘ	ネ 子	テ	セ	ケ	エ	
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	
	ヲ シ	ロ ロ	ヨ	モ モ	ホ ホ	ノ	ト	ソ	コ コ	オ	

(注) 仮名書き本文・漢文本文共に字体に大差が認められないので、統一して示した。

尚、○印を付したものは、仮名書き本文のみに存する字体であることを示す。

「ウ」「ツ」「ミ」など、鎌倉時代中期頃の様相を呈している。

又、踊字についても本行・付訓の区別なく、その特徴は同様である。⁽¹⁰⁾

二字の踊字

諸^{モロク} (24) たま^ク (36) 抑^{ソモク} (63) 念^{ネムク} (108) こと^ク (112) もろ^ク (132)
三字以上の踊字

ゆけとも^ク (210) みれとも^ク (211) はつへし^ク (312) すくれとも^ク (209) かなしむへし^ク (312)
いずれも下字右傍の真中か右下寄りから、踊字の起筆位置がある。

b、音韻について

㊦ m・nの表記

撥音韻尾 m と n との本資料に於ての表記は、和語・字音語共に混同している。このことは、鎌倉中期には m・n を区別し表記する規範性がなくなつた⁽¹¹⁾と、説かれることと一致をみる。

○和語で正用のもの(和語の例はいずれも本行である)

いはむや(90) はこむて(95)

○和語で混用のもの

いはんや(39) むまれん(70)

○字音語で正用(m↓ム)のもの

今生(33) 菩提心(60) 一念(61) 佛心(66) 善男子(129) 断金(256)

○字音語で正用(n↓ン)のもの

人間(27) 安然(44) 天下(64) 讚嘆(75) 本不生(100) 善根(120)

○字音語で混用(m↓ム)のもの

炎天(35) 一念(77) 懺悔(80) 念佛(160) 九品(162) 林地(206)

○字音語で混用(n↓ム)のもの

- ① 語頭の「イ」と「キ」と「エ」と「エ」
- 炎天(35) 身心(38) 安然(44) 善男子(129) 方便(217) 青蓮(223)

「イ」と「キ」に関しては、混用例はなく、何れも古用に適うものである。

ゐて(50) くらゐ(250)

歌詠(207) 威徳(228) 威光(243)

又、語頭で「エ」と「エ」の混用する例は本行・付訓共に存する。

○古用に適うもの

あへり(94) ゆゑに(100)

輪廻(28) 炎天(35) 終焉(73) 集會(207) 圓滿(220) 廻向(281)

○混用例のもの

終宮(35) たえさらむ(105) 結縁(138) 廻向(286)

㊦ 合拗音

合拗音「クワ」「クキ」「クエ」の表記法は、直音化する以前の古用の形態を保っている。

「クワ」 栄花(39) 野外(48) 苦果(55) 本願(69) 廣大(155) 光曜(196) 満月(229)

「クキ」 餓鬼(26) 玄軌(63) 高貴(219) 巍々(228)

「クエ」 朗月(26) 玄軌(63) 一花(63) 懺悔(80) 蓮花(179) 化主(291)

但し、合拗音「クエ」の開音節化した例が一例拾われた。

外脱(194)

㊧ 唇内入声音の表記

唇内入声韻尾「-p」の表記について、「-フ」の古用に適ったものと、「-ウ」と開音節化したものと表記の混用が認められる。

○古用を保っている例

劫コト(77) 罪業コト(82) 佛法ホツ(126) 樂カラ(170)

○開音節化の例

法界ホウ(65) 引接キツ(73) 怯弱カウ(140) 入定ニツ(208)

又、威授業韻の「業」には「コフ」と正用表記の例の他に、次のような表記も存する。

業障コト(80)

この表記は熟語「業障」の場合に認められ、入声音「業」に続く「障」の字の頭子音が無声子音「s」であるので、促音化したものと考えられる。

④ □頭語的語詞

驚オドロク(12)

和語「おとろく」の未然形＋助動詞「す」の語形であるが、もし、誤記でなければ「ロ」↓「ラ」と母音の逆行同化現象を起こし、「ヲトラカス」の形をとったものと見られる。

斯様に言語事象に関して検討してみれば、当然のことながら鎌倉時代中期の時代性を示す顕著な事例が多く認められた。特に踊字について片仮名文と平仮名文とが踊字の起筆位置が同位に定まることや、呉音・漢音の区別方法、又、古用の姿を留めながらも□頭語的用法も存する事など、本資料の特徴として指摘することが出来る。

注

(1) 隨心院第三十八世(法脈は三十四代) 門跡玉島實雅和尚編『隨心院史略』(隨心院刊・昭13年)に詳細が記されている。

又、拙稿『訓點語と訓點資料』第八十三輯にも概要を述べた。

(2) 注(1) 拙稿。

(3) 講式については拙稿『鎌倉時代語研究』第11輯参照。

(4) 『鎌倉遣文 古文書編』19巻(東京堂出版、昭55年)

(5) 本資料83行目下部に焼跡と思しきものが認められ、焼失の可能性も否定出来ない。

(6) 「往生講式」の伽陀については、次の論文に詳しく論考されている。乾 克己「往生講式」と仏教歌謡」(『金澤文庫研究』274号、昭60年)

(7) 岩原諦信『南山聲明の研究』(昭7年)・前掲拙稿(3)

(8) 木下政雄「日本の美術」181号・鎌倉時代の書」(至文堂、昭56年)

(9) 山田昭全「講式と中世文学」(『解釈と鑑賞』第51巻6号、昭61年)

(10) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要 特集号3』、昭46年)

(11) 注(10) 論文

〔付記〕 経蔵を調査させて頂き資料の公開の御許可を賜った随心院市橋真明僧正の御高情に深謝申し上げ、又、撮影には仁和寺小林弘侑総務課長に公務を曲げて御協力を賜った。

本稿を成すに当り、広島大学小林芳規教授・山本真吾氏には格別の御指導を仰いだ。ここに銘記し稽首作礼厚く御礼申上げる次第である。

翻刻

翻刻文 凡例

- 一、本稿は、随心院藏仮名書き往生講式（一卷）の全文を原文に忠実に翻刻したものである。
- 一、原本の行取の通りに翻字し、行頭に通し番号を附した。又、各紙毎にその紙数を記した。
- 一、翻刻文の漢字字体は原則として通行旧活字正字体に従い、誤字・宛字・抄物書と認められるものも原本の漢字に翻字し、その左傍に正字と考えられる漢字を（ ）にて注した。
- 一、原本の字体と活字正字体とが異なるものについては、その主なものを「異体字一覧（別掲）」に従い翻字した。
- 一、原本の片仮名、平仮名の字体は現行通用字体に改め、声点の位置は「嚴・平」の如く表示した。
- 一、破損・虫損の箇所は墨痕・残画によって推読し、全く解読不能の場合は□を以て表示した。
- 一、本行に於て別筆と思われるものについては「」にて記した。尚、印刷の都合上声点などについては脚注に示した。
- 一、*印は、それを附した箇所が脚注に採り上げてあることを示す。
- 一、翻刻の平仮名表記箇所の右傍には本文の内容理解に資するため、大正新修大蔵経所収本によって当該漢字を掲げた。
漢字表記の箇所についても、当該漢字と異なる場合には、これに準じた。
- 一、料紙闕落の部分は、大正新修大蔵経所収本によって本文を補い、本文通読の参考とした。

異体字一覽

害	咽	隨	殺	願	垂	淨	胃	龜	啓	懃	座	備	講	講
害	咽	隨	殺	願	垂	淨	胸	龜	啓	極	座	備	講	講
衆	熱	念	懃	蓋	衰	修	淚	日	第	緣	謹	等	陀	壁
衆	熱	念	懃	蓋	衰	修	淚	因	第	緣	謹	等	陀	壁
衆	鬼	須	業	有	取	寶	土	填	幸	勞	輝	於	迄	旃
衆	鬼	須	業	有	取	寶	土	填	幸	勞	輝	於	迄	旃
衆	鬼	須	業	有	取	寶	土	填	幸	勞	釋	於	迎	彌

功	弘	躰	後
功	弘	體	後
九	円	劫	曰
凡	圓	劫	四
思	僧	從	惡
思	僧	從	惡

隨心院藏仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

(1) 「東院地藏堂」

2 「往生講式」

3 「先西壁安阿彌陀佛迎接像」^{*}

4 「次備香花等 次傳供 歌頌曰」

數

5 「若人散亂心 乃至以一花 供養於畫像 漸見無量佛」

6 「次着座 次法用 次表白」

7 「謹^{ツ、シ、ミ、ウ、ヤ、マ、テ}敬 一代教主釋迦如來極樂化主彌陀種覺」^{*}

*彌——某字ノ上ニ重ネ書

8 「十方證明恒沙諸佛^{*1} 構讚淨土阿彌陀經法界緣起」^{*2}

*1佛——右傍補入
*2彌——某字ノ上ニ重ネ書

9 「權實聖教觀音勢至地藏龍樹等諸大菩薩身子」

10 「目連迦葉阿難等」諸賢聖衆惣始^{ハシメテヨリ} 自極樂界會九

11 「品蓮臺清淨大海衆」乃至盡虛空遍法界三寶願

12 「海令驚啓」^白弟子某^弟 弟子希生 東隅幸聞西教

13 「億劫一遇如一眼龜然」非^ニ宿^一因^一今何視聽悲^一喜

14 「填胸淚浮雙眼於焉禪林春朝花色自增觀」

15 「念孤山秋暮風聲纒爲^ニ知識^一夫猷穢^一土欣^ニ淨^一土^一

16 「非此時又何時乎因^レ之迎^ニ每^一月十五日^一修^ニ一^一座七^一

17 「門講乞願界三寶願界垂哀愍^一弟子所願^一得^一

18 「成一就^一講演之趣蓋在^レ於^レ斯^一矣今此講演略有七門^一

*藏次二「次神分次勸請」

*割注一藏ナシ

隨心院藏仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

19 「一ニハ發菩提心門 二ニ懺悔業障門 三ニ隨喜善根門

20 「四ニ念佛往生門 五ニ讚歎極樂門 六ニ因圓果滿門

21 「七ニ廻向功德門

22 「第一發菩提心者夫欲トイハ*往淨土必發道心人非ヒトスホ木

23 「石セキニコノメ好メ自發心夫欲發菩提心者須モテハスヘカラク觀流來生死ヲイユル所シ

*セ——虫損

24 「謂想フモヒヤレ像無始ヨリコノカタ以來輪シテ廻シテ六趣ニツクサニウケシ備モロク受ク諸ハムセヒ若ク或ハムセヒ咽ヒ

25 「焦熱大焦熱之炎ホノラニ或ハ紅蓮大紅蓮の氷ニ

(3) 26 「閉とアルイちられ或アルイは餓鬼飢饉カクヘケコンのうれえにしつみ

27 「或アルイは畜生チクシヤウサンカイ殘害之悲のかなしみにあえり 人間ニシケム

*夫——藏此字ナシ

28 「の八苦天上ハツクテニシヤウの五衰ゴスエイ 總總 之間之間 すべて輪廻リンエのあひたに

是 如 受 幾

29 「かかくのこときの苦クをうけし事コトいくそはく

只是 爲 恚

30 「そそや □れ一旦タシの名利ミヤウリのためにほしき

作 由 也 今

31 「ままくに衆罪シュサイをつくりしによりてなり この

度 若 厭 不 亦 悲

32 「たたひもしいとはすは當來タウライもまたかなし

可 而 求 者

33 「むむへし しかるを名利ミヤウリをもとむるものは今生コムシヤウ

猶 安 不 凌

34 「ななをやすからす嚴ケン・平濁寒カン・平平に氷コホリをしのいて日ニチ

拭

35 「夜ヤに經營ケイエイし 炎天エンテムにあせをのこひて東西トウサイに

適 有 復 一

36 「馳走チソウす たまたまく一一あればまたひとつは

*あ——虫損

*天——左傍ハ汚レ

*嚴寒——声点ハ別筆ニテ重ネ書

37 「かけぬ 少 有 付 憂 無 付
あるにつけてもうれへなきにつけ

38 「てもうれふ 憂 安 時
身心劬勞してやすきとき

39 「あることなし 有 無 何 況
いかにいはんや朝 榮花

40 「をひらけとも 開 暮 之 風
ゆふへには無常のかせに

41 「したかひ 隨 宵 翫
よひには朗月をもてあそへ

42 「とも 曙 之 隱
あか月には別離の雲にかくれぬ

43 「一生 是 風 前 之 燭
はこれかせのまへのともしひ 万事は

44 「みなはるのよのゆめ 皆 春 夜之夢 豈 只
あにたゞ安然とし

(4) 45 「てゆかのうゑにねふらむや 床 上 眼 平 忽
無常たちま

*別——左下方ハ虫損

*み——虫損

46 「ちにいたりなは 至 何 いかゝ逃 「・」のかるゝことを得 **えん** 焉

47 「**主君**もたすけす資 不 親昵もかはらす替 不 北亡北ハツの(臣)

*す——虫損

48 「**露**ときえぬる 消 之暮 ゆふへにはいたつらに野外ヤクワイ (去瀬)に

49 「おくり東岱トウクイの雲クモとのほる朝アサには 送 昇 之 空 むなし

*雲——虫損

50 「くハツシツ亡室をとふらふ 謗 然 しかるを獄率コクソツのゐて(卒) 將

51 「さ去之道るみち涙に流はなみたをなかけて 獨 ひとり

52 「ゆき 行 魔王マワウカシヤク呵黄嘖(實)のにはには * 之庭 膝 屈 ひさをかゝめ

*呵——偏、虫損

53 「てひとりかなしむ 孤 悲 哀 哉 再 あは心れなるかなや 再 ふた

54 「たひ三途ツの故郷コキヤウにかへりてかさねて歸 重 惡趣アクシユ

55 「^之の^{*}苦果^{クカワ}をうけむことしかし^受はやく^{不如}一生^{シヤウ}の名^之」

*の——虫損

56 「利^リをいとひて^厭ひとへ^偏に^(下)菩提^{ホクタイ}の^之妙果^{メウカワ}を

57 「期^キせむ^若には^自もしみ^厭つからいとふ^{*}ことをえては^得

*と——虫損

58 「他^タの^未いまたいとはさる^厭ことをかなしむ^悲へし

59 「今^{イマ}浄^{シヤウ}土^トをもとむ^求ることは^只たゞ^{衆生}の^ヲ

60 「ため^爲なり^是これを^初菩提^{ホクタイ}心^ノのはしめ^{之初}のはし

61 「め^爲とす^今いま^之一念^{ネム}菩提^{ホクタイ}心^ノの^之寶珠^{ホウシユ}「・」^已すて^第に^八

62 「頼^ネ耶^ヤの^之ころもの^裏うら^繫に^斯かけつ^{マコトニ}これ^實實

*頼——虫損

63 「長^{チヤウ}夜^ヤの^之明珠^{メイシユ}浄^{シヤウ}土^ノの^之玄軌^{クエンキ}なり^也抑^{ソモク}一^イ花^{クヱ}

64 「ひらけぬれは天下テンカみなはるなり ひとり

65 「ひホツシム發心すれは法界ホウカイことくく道ミチなり 身ミハ

66 「は人身ニンシムなりといゑとも 心ココロは佛心ブツシムにをなし

(5) 67 「すスてにおこしかたき道心ミチココロをおこしつ

68 「なむそゆきやすき 淨土ジユウにゆかさらむ

69 「彌陀オミダの本願ホンガンにいニはく 十方ハツフの衆生シュシヤウ菩提ホクタイ

70 「心シムをおこして わかくにニむまれんとおもはん

71 「に命終メイシュウのときトキにのそみてその人のまへに

72 「現ケンせずといはハ正覺シヤウカクをとらしと このゆへに

*彌——虫損

73 「終シユ焉エン」のゆふへに彌陀ミタの引接インセウにあつからむと
之暮 預

74 「お」もは、おのく堅固ケンコの道心ドウシンをこして
欲 各 發

75 「菩提心タイシムを讚嘆サンケンし彌陀ミタ禮拜ライハイすへし 頌曰シュニイハク
彌陀佛 矣 歌頌

76 「菩薩ホサツヲ於生シヤウシ死シ 最初發心サイシヨホウシムシ時 一向求菩提カウクホグイ 堅固不可動ケンコフカトウ

77 「彼ヒ一念功德ネンクツトク 深廣無涯際シムクラウムカイサイ 如來分別說ヨライフンツセツ 窮劫不能盡クワフクフノウシム

78 「願クワン共諸衆生シヨシユシヤウ 往生ワウシヤウ安樂國アンラクコク

79 「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀仏ミツライ 十念ジュン
次禮拜

80 「第二タイに懺悔業障サンケゴウシャウトイハ 者シさきには菩提心ホクタイシムををこ
前 發

81 「しつ つきに業障コウシャウを懺悔サンケすへし 那人トの
次 夫 之

*願——虫損

82 世在誰 畏
「よ」にあるたれか罪業をおそるゝ後世を

83 知不 恣 衆罪 作 尤*
「しらすして ほしきまゝに悪をつくる もとも

84 愚 也 引 云
「を」ろかなり 安樂集に經をひきていはく

85 「人一日一夜をふるに八億四千万の思ひ

86 *有 起 一生 得
「あり 一念悪をおこせは一の悪身をへ 十念

87 發 受
「悪をおこせは十生の悪身をうく 乃至

88 復 爾 云云 是 如
「千万億の念もまたしかなり文 かくのことく

89 「日」日の惡念の報「・」すら「・」うけつくさむことなを
受 盡 尙

90 難 況 之間
「かたし いはむや一生のあひたの惡業を

*とも——焼跡

*あ——虫損

91 「やいかにいはむや 無始よりこのかたの悪アツ

92 「業コフおや かなしきかなや 未来無窮ミライムクウの生シヤウ死シ

93 「出離シュツリいつれのときそや さいはるにいま大乗タイショウ

94 「懺悔サンクヱの法ホウにあえり おのく三業コフにまことを

95 「はこむて事理シリの懺悔サンクヱを修シュすへし まつ事シ

96 「の懺悔サンクヱといは 五體ゴタイを地チになけて遍身ヘムシン

97 「にあせをなかし 發露ホツロ涕泣テツキツして罪障サイシャウ

98 「を懺悔サンクヱするなり つきに理リの懺悔サンクヱといふは

99 「一切サイの業障コツンヤウはみな妄想マワソウより生シヤウして自性ジシヤウ

*ロ——「テイ」ヲスリケシ、某字ノ上ニ重ネ書

100 「空^{クラウ}なり 自性^{シヤウクワ}空^{クワ}なるかゆへに本不生^{ホンフシヤウ}なり 故^コ也^ヤ

101 「この觀^{クワン}をなすとき妄想^{マウサウ}ゆめさめて 此^{コノ} 作^{サク} 時^ジ 夢^ム 覺^{カク}

102 「生死^{シヤウシ}本^{ホン}無^ムなり 衆罪^{シュサイ}つゆきえて輪廻^{リンエ}こゝ 露^ロ 消^{シユ} 爰^{コノ}

103 「にたえぬ 頓證^{トシヨウ}菩提^{ホクタイ}の道^{ダウ}この觀門^{クワンモン}に 絶^{ケツ} 如^ニ 無^ム 但^{ダニ} 斯^ス

104 「しくはなし たゞし事理^{シリ}の懺悔^{サンクエ}に 堪^{カン} 不^フ 者^{シャ}

105 「たえさらむものは 一心^{シム}に彌陀佛^{ミタフツ}を念^{ネム}し 之^ノ 間^{カン} 能^ネ

106 「たてまつるへし 一念^ニのあひたによく八十 之^ノ 間^{カン} 能^ネ

107 「億劫^{ブクワ}の生死^{シヤウシ}のつみを滅^{メツ}す いかにいはんや 之^ノ 罪^{サイ} 何^ニ 況^{キヤウ}

108 「念^{ネム}くをや 此^{コノ}のゆへにつねに彌陀^{ミタ}を念^{ネム}する 乎^カ 是^シ 故^コ 常^{ジョウ}

*イ——「提」ノ最終画ノハネト重ナル

*え——右傍二片仮名アレド不詳

*た——虫損

者 恒 之 也 今

109 「ものはつねに懺悔を修する人なり いま

此 等 力 以

110 「これらの懺悔のちからをもて 弟子か罪

自 始

(7)

111 「障よりはしめて 乃至一切有情の業障

皆 悉 仍 各

112 「みなことごとく懺悔すへし よておのく 勇

發

113 「猛懺悔の心をおこして罪障を懺悔し

彌陀佛

114 「彌陀を礼拝したてまつるへし 頌 曰

矣 歌頌

115 「一切業障海 皆從妄想生 若欲懺悔者 端坐思實相

116 「衆罪如霜露 惠日能消除 是故應至心 懺悔六情根

117 「願共諸衆生 往生安樂國

二反

*ナイシ——一部料紙ノ繼目ト重ナル

次禮拜

118 「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀仏 三念十礼

119 「第三タイニ 隨喜善根スイキセムコンといふはすてに罪障サイシヤウサンを懺

120 「悔クヰしつ* 次 つきに善根センコンを隨喜スイキすへし いはゆる 謂

121 「無始ムシよりこのかた はなるへき生シヤウシ死シをはなれ

122 「ざるはかなしみなりといえとも(モ) 無量億劫ムリヤウバククワ

123 「にもあひかたき聖教シヤウケウにあふことをえたる

124 「はこれよろこひなり たまフツケウく佛教ブツケウにあふ

125 「ことはかならず宿善シュクセムによる もし宿福シュクフクう

126 「すきものは仏法フツポフ流布ルフのよにすら[ラ] 「・」なをう

*つ——虫損

127 「まるゝこと＊をえす いかにいはんや たや
得不 何 況 輒

*こ——虫損

128 「すく受持シユチトクシユ讀誦することヲをえむや かるか
得 乎 故

129 「ゆへに念佛ネムフツ三昧マイキヤウニイハク經云 もし善男子セムナムシ善女センニヨ
若 名 聞

130 「人ニンありて この念仏三昧のみなをきか
有 此 名 聞

131 「むものはまさニにしるへし かの人はたゝ
者 當 知 彼 唯

132 「二三四五の如來ニヨライの御ミもとにして もろくの
所 諸

133 「善根センコンをうゑたるのみにあらず すてに無ム
種 非 已

134 「量阿僧祇リヤウアンソウキのそこニはくの如來ニヨライの御ミもとニ
爾 許 所

135 「して もろくの善根センコンをうゑて この三昧王マイソウの
於 種 而此

(8)

136 「名字ミヤウシをきくことをえたり 聞 獲 何 況
いかにいはんや

137 「受持シユチトクシユ讀誦トクし」・「法ホウのことくに修行シユキヤウせむを 如

138 「や略抄リョクシヤウ われら往昔ワウシヤクの結縁ケツエンをおもへは宿善シユクセム 我 等 思

139 「恒沙コウシャのことし 如 妄 輕
みたりに自身シナムをかるめて

140 心 極 難 之
「こゝろ怯弱カウニヤクせされ」・「はなはたあひかたき教クワに 不 甚 値 難 之

141 「あひて 極 難 之
きはめて信シムしかたき法ホウを信シムす 久 殖 非 自

142 「ひさしく勝因シヨウインをうゑたるにあらすよりは 何 由 忽 此 緣

143 「なにゝよひてか たちまちにこのえむに 値 愚 哉

144 「あはむ おろかなるかなや 恒沙コウシャの宿善シユクセムを

*恒——右下方ノ点ハ虫損

145 「具^クせる身^ミの一旦^{タシ}の名利^{ミヤウリ}にかへられて 又
之^之 舊^之 里^里 還^還 更^更 拘^拘 被^被

146 「三途^ツのきうりにかえりて さらに「・」多^タ百千
之^之 舊^之 里^里 還^還 更^更

147 「劫^{クワ}を經^{ヘン}ことを 積善^{シヤクセム}の餘慶^{ヨクケイ}ありて さいはる
幸^幸

148 「に人身^{シム}をえたり もし教^{ケウ}のことく修行^{シユキヤウ}し
得^得 若^若 如^如

149 「もし法^{ホフ}のことく隨喜^{ズイキ}せば 現身^{ケンシム}になむそ
若^若 如^如 何^何

150 「三昧^{サイ}を發^{ハツ}せさらむ 臨終^{リンシュ}になむそ如來^{ニョライ}を
不^不 哉^哉 何^何

151 「みたてまつらさらむ そのときの歡喜^{クワンキ}
見^見 不^不 哉^哉 其^其 時^時

152 「いくそはくそや このゆえに弟子^{テシ}か宿^{シユク}
幾^幾 是^是 故^故

153 「善^{セン}より始^始めて 乃至^{ナイシ}一切^{サイウシヤウ}有情^ウの「・」漏^{ロム}無^ム漏^ロ
自^自 始^始 有^有

154 「の善根セムゲン 皆悉皆悉 みなことごとくスエキ 隨喜すへし 仍おのくヨテ 各

(9) 155 「廣大隨喜クワクタイスイキの心をもて善根セムゲン 讚嘆サンタンし 彌陀ミダ 彌陀佛ミダブツ 以以

*イ——虫損

156 「を禮拜ライハイすへし 頌曰シュニイハク 矣歌頌矣歌頌

157 「若人無善本ニヤクニンムセムホン 不得聞此經フツモンシキヤウ 清淨有戒者シヤウシヤウカイシヤ 乃獲聞正法ナイキヤクモンシヤウホウ

158 「願共諸衆生クワンクシヨシユシヤウ 往生安樂國ワウシヤウアンラクコク 二反二反

次禮拜

159 「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀仏三礼 十念十念

160 「第四タイに念佛往生者ネンブツワウシヤウトイハ 凡凡 茲茲 之興之興 おほよそこの講カウのおこり

161 「心志さしこの門モンにあり 事是これ至要シヨウなり 行者キヤウシヤ

162 「心意をととむへし まつかの極樂コクラクの中に九品ホシの

隨心院蔵仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

163 「差別シヤヘツあり有 且 説 云
しはらく下品ケホシをときていはく 或モシ

164 「人「・」つふさに十惡アク五逆キヤクをつくれらむ【三】 命終ミヤウシユの

165 「とき時にのそみて 善知識センチシキにあひて十念ネムを時 臨 遇

166 「具足クソクすれば すなはち往生ワウシヤウすることを即

167 「う略抄 餘ヨの淨土シヤウトの中得にはいままたこれらの未 此 等

168 「罪人サイニンはむまれす 又彌陀ミタ如來ニヨライに四十八の生

169 「願クワンまします在 (第弟十八)願クワンニイハク云 十方シユシヤウの衆生シユシヤウ心を至 我 生 欲

170 「いたし 信樂シムケクしてわか國クニにむまれむと思

171 「はんに 乃至オイン十念シツネンせむに もしむまれすと若 生 不

172 「いはゞ正覺をとらしといえり 餘の諸仏の

者 取不 云

173 「中には いまたかくのときの悲願をは

未 是 如 發 設 佛

174 「おこしたまはず たとひほとけに十念の

無 者 生 誰

175 「願なくとも土に五逆のものむまれは た

無 乎 設 者 無

176 「れか のそみをたゝんや たとひ土に五逆のものなくとも

*のそみをたゝんや——右傍ニ挿入 挿入符アリ

(以下料紙闕落アリ。大藏經本ニヨリ補フ。)

「佛在ニ十念願ニ蓋レ係レ侍乎。是以非ニ極樂ニ者何欣ニ

「淨土。非ニ本願ニ者誰生ニ極樂。夫佛果曠海雖ニ是ニ

「味。因位悲願彌陀尙勝。一子慈悲雖ニ實平等。攝取光

「明照ニ念佛者。非ニ唯以レ光攝取。亦忝與ニ聖衆ニ共

隨心院藏仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

「來摩頂乎。爰知。我等厚結緣於彌陀。深悲願於我

等。靜思往昔結緣之厚。心念念在恃。情思大悲

誓願之深。淚連不留。實四十八大願併爲衆生。

「僧祇劫苦行偏爲我等也。何彌陀發難發之願」

「引接我等。何我等遇難遇之願。不念彌陀。」

「速拋萬事。一心稱念。悲願是深。引接何疑。抑一生

終有_レ限。長別此界。時想像。彌陀如來紫磨黃金之

粧嚴與_レ聖衆俱來。黃金色映徹蒼天皆黃。白毫光赫

「奕國土普明。始見此事。時歡喜淚幾。南無西方極樂

「化主阿彌陀佛。本願不誤必垂_レ引接。南無九品蓮臺

「清淨大海衆。與_レ如來共定爲_レ來迎。仍各凝_レ決定

「往生想。讚_レ歎本願禮_レ拜彌陀佛_レ矣

「歌頌曰

「其佛本願力

聞名欲往生

「皆悉到彼國

自致不退轉

「願我臨欲命終時

盡除一切諸障礙

「面見彼佛阿彌陀

則得往生安樂國

「南無西方極樂化主大悲阿彌陀佛三禮十念

「第五讚歎極樂者。前明_ニ聖衆來迎。次長別_ニ娑婆

初 生 其 時

177 「れてはしめて極樂コクラクにむまれむ そのときを

想 像

178 「おもひやれ 瑠離ルリの地チには寶樹ホウシュキヤウ行「・」烈レツして影ヤウ

(列)

179 「光赫奕クラウカクヤクたり 七寶ホウのいけ池には蓮花レンムクエカイフ開敷

180 「して馨ケイ・香キヤウ・芬列フンレツ・入平響フンレツせり 樹下シュケには天人テンニンシヤウシユ聖衆シユあそぶ

*声点——別筆

隨心院藏仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

181 光 「ひかり花の色に映し」 「池のほとりには鶺鴒（去濁）」

*声点——別筆

182 「鶺鴒（平）」 さえつるこゑなみのおとに 「和す」 また

轉 聲浪音 又

183 「宮殿（去濁）」 たり 樓閣（入重） たり 鳳（去濁）のいらか

*声点——別筆

184 「黄金（去濁）を

連 瓦 竝

*鶺鴒——右傍ハ虫損

185 「寶幢」 「地をてらせは」 「旛蓋」 「天に」 「ひるかへる」

照 之壁 畫 翻

186 「山水（去濁）」 かけたゝむて 頗梨（去濁）のかへにゑかけるかと

影 疊 之壁 畫

187 「うたかひ花幢（去濁）」 かたちうつりて瑠璃（去濁）のと

疑 像 寫 之樞

188 「ほそに花（去濁）さけるかとあやまつ 玉（去濁）のすたれ

誤 珠 簾

189 「をあくれは 嬰珞（去濁）つゆをたれてかせにし

上 露 垂 風 隨

190 「たかひて亂轉ランゼンし かねのとひらををしひら
金 扉 排

191 「けは「・」異香イキヤウまつくむして「・」沈壇チンタンに「・」ほひを
先 薫 *芳

*に——上部ニスリケシアリ

192 「ましへたり 臺ウチにはしけり むかし聞キし忍ニン
交 布 昔

193 「辱ニクの寶衣ホウエを帳チヤウにはたれたり いにしへもと
之 垂 古 求

194 「めし外脫ケダツの瓔珞ヤウラクを また 寶座ホウザ ならへ
之 又 *竝

*ホ——虫損

195 「又寶衣ホウエをかさねたり 莊嚴七寶シヤウコンを「・」ちり「・」
重 鏤

196 「はめ「・」光曜クワウヨウ「・」らむ「・」けいを「・」みかく「・」簫笛セウチヤク琴キン篋キヤク
鸞 鏡 瑩

197 「篋樂コカクを雲クモのうゑに奏ソウし 琵琶ヒハ鏡ネツトウ銅ウハツ鈸ハツ「・」
於 上 鏡

198 「曲キョクをはしのもとにしらふ 苦無常クムシヤウのこゑには
於 階 下 鎗 音

(11)

199 「大悲ヒのなみたさきたてをち之落落空ク「・」非我ヒカの*

*ヒ——虫損

200 「しらへには之實相シツサツの理リ「・」漸ヤウキョクにあらはる顯しかのみ加

201 「ならす徐よそく留りのちをあゆめは金繩コシヨウ

202 「道ミチを「・」さかひ「・」漸ヤウヤく梅壇セウダンの林ハヤシをすくれは過

203 「落花ラクカみちをうしなふ路功德池クツクツチのはまをゆけは濱行行

204 「なみ波苦空ククウをとなへ唱樂音樹カクランジュのもとにいたれ下至至

205 「は「・」かせ常樂シヤウラクをしらふ風宮殿ククテンより宮殿ククテンに調從從

206 「いたり至林池リンチより林池リンチにいたるに*或は説法アルイセツホウ

*リ——虫損

207 「集會シユエのところあり之或有伎樂歌アルイハキカクカ詠キヤウの所トコロ

*ウ——虫損

208 「あり 有アルイハサセンニウチヤウ 或アルイ 坐禪入定ニウチヤウ の所之あり之 處有之 過* 或アルイ は神通センツウ

*ル——虫損

209 「遊戯ユゲの所之あり之 處有之 過トコロ 宮殿樓閣クツテンロウカクはすくれともく過

*ト——虫損

210 「つきもせず 盡トク 不フ 行ユク 行ユク 際サカイ

211 「なし 無ム 實ジツ まことに浄土シヤウトニヤウコンの莊嚴シヤウカンはみれともく見 いや見 長チヤウ

212 「めつらなるかなや 今イマ 哉ヤ 猶ナカレ 駐チ 者モノ 心ココロなをとく留 まるは 黃金ワウゴン

213 「樹林ジュリンのゆふへのいろ 之暮ノキ 色シキ 涙ナミダ 留トドマ 不フ 者モノ なみたとく留 まらざるは

214 「上品蓮臺ホシレンダウのあか月のかく 之曉ノトキ 樂ラク 凡ソボ おほよそ色イロを

215 「み 見ミ 聲コエ 聞ク 皆ソレゾレ みな見仏ケンブツ聞法モンポフの因イン 緣エン *
*エ——某字ノ上ニ重ネ書

216 「かをかきあちはいをなむるに 香カウ 聞ク 味ミ 嘗シ 是コト 心シン 發ツク 心シン 此コノ 發ツク 心シン

217 「修行シュキヤウの方便ハウヘムなり かくのごとく経歴キヤウリヤクしてついで遂

218 「に大寶ホウの宮殿クツテンにまうてゝ 始始はしめて彌陀

219 「如來ニヨライを拜ハイしたてまつれば 妙覺メウカク「・」高貴カウクキの「・」

220 體殊珍殊珍 「すかたすかたことことにめつらしく 仏果圓滿フツクワエンマンの相サウ「・」これ是

(12) 221 「あらたあらたなり 面輪端正メンリンクンシヤウにして秋アキの月雲クモを

222 出出 「いてゝ 白毫ヒヤクカウかくやくとして春ハルの日日「・」ひかり光を「・」そふ添

223 「青蓮シヤウレンの鮮まなしりあさやかにして慈悲シヒの

224 「相サウを現ケンし 丹葉タンカフのくちひるいつくしうして 脣脣 嚴嚴

225 「愛敬アイキヤウの相サウを含ふくみ給えり おほよそその凡厥厥

*ウー——某字ノ上ニ重ネ書

226 「一々の相海金山王の體をめぐりて 無量の

227 「光明十方世界をてらさすといふことなし

228 「尊相蕩々たり 威徳魏々たり 聖衆は

229 「星のこづくにつらなりて満月の尊容を

230 「ほめ 諸天は雲のこづくにあつまりて微

231 「妙の音楽を奏す むかしはわづかにつたへ

232 「聞し彌陀如來の名號 いまはまのあたりに

233 「拜見す 八万四千の相好をあに「・」はかり

234 「ぎや むなしきゆかにひとり念佛せしよ

235 今^{イマ} 衆會^{シユエ} につらなりて たちまちに^{コヤク} 巨益

預 矣 加之

236 「にあつかるへしとは「・」しかのみならず「・」十方世界^{ハウセカイ}に

返

237 「往反^{ワウヘン}「・」遊行^{ユキヤウ}して「・」初成道^{ショウシヤウダウ}の「・」仏には轉法輪^{テンホウリン}を

得

238 「請^{シヤウ}し「・」入涅槃^{ニワネハン}の「・」仏には「・」久住世^{クヂウセ}を請^{コラ}「・」益^{ヤク}を^{コト} 爲^ス

預 亦 復 是 如 各*

239 「記^キにあつかる事またくかくのことし 仍^{ヨリ}極大^{コトクタイ}

*コ——某字ノ上ニ重ネ書

240 「歡喜^{クワンキ}の心に住^{ヂウ}して極樂^{コクラク}を讚嘆^{サンタン}し 彌陀^{ミミダ} 彌陀佛^{ミミダハツ}

矣歌頌

241 「を礼拜^{ライハイ}したてまつるへし 頌^{シユニイハク}曰

242 「觀^{クワン}彼世界^{ヒセカイ}相^{サウ} 勝^{シヨウ}過^{クワ}三界^{サンカイ}道^{ダウ} 究竟^{クワウキヤウ}如虛空^{ニヨコクウ} 廣^{クワ}大^{タイ}無邊^{ムヘン}際^{サイ}

(13)

243 「面善圓淨^{メンゼンエンシヤウニヨマンクワツ}如滿月^{ニヨマンクワツ} 威光猶如^{オウクワユニヨセンニチクワツ}千日月

*——料紙ノ繼目ト重ナル

244 「聲シヤウニョク如ニョク天テン鼓ク俱ク翅シヤ羅ラ 故コ我カチヤク頂ライ礼ライ彌ミ陀タ尊ム

245 「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀仏 十三礼念

246 「第六ダイに因イン圓エン果クワ滿マム者トイハ 者前 さきには自行シキヤウシヤウシエ成就ジュウジツし

247 「て極樂ゴクラクに往生ワウシヤウすることをあかしつ つぎに 明明 次次

248 「利他リタエンマン圓滿エンマンして 菩提ホクタイを證得シヨウトクすることをあか *1 明 *2

249 「すへし いはく彌陀ミタに奉フ・(平濁)仕シして 不退フタクタイの 謂謂 佛佛 請請

250 「くらゐを證シヨウし ほとけの加被カヒをうけて 位位 佛佛 請請

251 「まつこの界カイにきたりて結縁ケチエンのもの 先先 此此 來來 者者

252 「をみちひき 無縁ムエンのものとふらはん 導導 者者 訪訪

* 1 他——偏、虫損

* 2 ク——虫損

* 声点——別筆

253 「或は慈念アルイシネムきくいくの父母フモたり 或はアルイ

254 「至シ上ウ孝カウまノ 鐘シツ・平アイ・愛アイまノ男女オニヨメたり 或は春アルイシユン・平フウ風フウ・平シウ輕シウ秋シウ・平シウ *1 *2 声点——別筆ニテ重ネ書

255 「月グエツ入ニ瀾ラウの良ラウ・平ウ友ウまタリ 或は飛アルイヒ・平クワ花クワ・平ラフエウ落葉ラフエウの同トウ

256 「行キヤウたり 斷ツ去キム金キム・平チちキリふカク「・」紫シ・平ラン蘭ラン・平カか

257 「たらひかうはし しかるをむかし娑婆シヤハに

258 「ありしには報謝ホウシヤなをかたかりき いま

259 「淨土シヤウトにむまれて濟度サイトなむのわつらひか

260 「あらむ それ弘誓ククセイのふねにさほさして

261 「あまねく四生シヤウの波浪ハラウをわたし 慈悲シヒの

鞠育之爲

*1 鐘 *2 之 爲

之 爲

爲

芳 然 昔

在 尙 難 今

生 何 煩

夫 船 掉

普 之 濟

(14)

262 車 脂 同 之 險
「くるまにあふらさして おなしく五道の・嶮(上)

263 阻 越 況 翼 者 遙
「・阻(上)をこさむ いはむや大智のつはさははる

264 鎖 之 空 翔 羽 者
「かに法性のそらにかけり 大悲のはねは

265 鎖 之 * 布 是
「とこしなへに生死の泥(平濁)にしけり かくの

266 如 常 輔 翼 所
「ことく大悲般若につねにふよくせられ

267 「て 十地究竟し万行圓滿せり 等覺の

268 夢 一 覺 不 至
「ゆめひとたひさめて 彼岸としていたる

269 所 無 是 則
「ところなし これすなはち本覺の如來

270 「なり 四智かゝみあきらかに三身月まと

*声点——別筆

*ヒ——虫損

隨心院藏仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

271 「かなり 抑ソモク 此等 是誰
これらの大事はこれたれか

272 「ちからそや 乎 只 是 彌陀 由
たゝこれみたの願力により

273 「て極樂ゴクラクに往生ワウシヤウする廣大クワウタイの恩徳オントクなり 仍ヨテ
之 也

274 「各オノオノ 堅固ケンコの信心シンシムをおこして 因果インノウの功徳クトクを
深 發

275 「讚嘆サンタンし 彌陀ミタク如來ニヨライラ 礼拜ライハイしたてまつるへし
奉 矣

歌頌曰

276 「頌曰

277 「三僧ソウキ祇耶キヤ大劫タイコフチウ中 具修クシユ百千シヨク諸若キヤウ行

278 「功德クトク圓滿エンマン滿遍ヘムホウ法界ホウカイ 十地チクキヤウ究竟シヨウ證シム三身シム

279 「願ガネン共諸衆生キョウジウシユ 往生ワウシヤウ安樂國アンラククニ

*な——虫損

*藏——此ノ一行ナシ

280 「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀仏 三念礼

281 「第七に廻向功德者タケもし人善根エカウククトクトイハを修セムコンしてシユ

282 「廻向エカウをもちゐるされは用不其その善微セムミゼウ少なり

283 「たとひ少善セウセムなりといえとも設法界衆生ホウカイシユンヤウに離

284 「廻向エカウすれば無邊ムヘムの功德ククトクとなる即小雲セウウム

285 「大タイ去虚キヨ・平ヘイに遍ヘンするかことし如たとひ一善セム

286 「なりといえとも亦井ホクイねはん音提に廻向エカウすれば淫弊

287 「又無盡ムシムの功德ククトクとなる成一雨ウを大海タイカイにくた降

288 「すかことし如廻向エカウのくとかまことにもて莫ハク・(入輕濁)

隨心院威仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻

289 「太タイ（ま）なるかなや 虚ソラ万シヤウ像ウミをふくみ海ウミ

(大) 納 之 爰 以 足

290 「百ハク・入セム輕セム川セム・平セム輕セムをおさむ 淨シヤウト土コフの業コフこゝをもてたん

為矣 仰 願

291 「ぬとす あふさねかはくは極コクラク樂ク化エシユ主ミタフツ彌ミ陀タ仏フツ

*樂——虫損

292 「九ク品フ蓮レム臺タイ清シヤウ淨ク 大*1海シユ衆タイ大シユ恩シヤカ教ソシ主シヤカ釋ソシ迦ソシ尊ソシ

*1大海イ——右傍補入、補入符アリ 藏二「大海」ハナシ

293 「十ハウ方コ護ネム念シヨ諸セン善セイ逝セイ 青シヤウ蓮レムのまなしりを 毗

*2主——虫損

294 「ならへて 弟テシ子シの丹タシ・平セイ・誠セイ・平セイをチ見ケンし 一サ座サの 竝

*声点——虫損

295 「講カウによりて二セ世クイの大クワン願シヤウをシユ成就セせむ *1 *2

*1イ——虫損 *2シ——某字ノ上ニ重ネ書

296 「いはゆる生シヤウ死シにおほりあり 今コン生シヤウをエト穢エト土ト

297 「のおほりとし菩ホ提タイにはしめあり 後コ世セをセ 之終 爲 始 有

*は——虫損

298 「淨土シヤウトのはしめとせむ おほよそ七門モシの功ク

*そ——虫損

299 「徳トクによりて往生ワウシヤウコラク極樂サンタムを讚嘆ソノクし 各ヲノク

*讚——偏、虫損

300 「五體クイを地チになけて彌陀ミタクニヨライ如來ライハイを礼拜ライハイし

*ミ——虫損

301 「たてまつるへし 頌歌頌曰

302 「依エ此シ諸シヨク功ク徳トク 願クワン於ニ命メイ終シュウ時ジ 得トク見ケン彌ミ陀タク仏ブツ 無ム邊ヘン功ク徳トク身シム

*得——虫損

303 「我カキウ及ヨシム餘シム信シヤ者ケケン 既ケン見ヒ彼フツ仏イ 願クワン得トク離リ垢クケム眼シヨウ 證ウシヤウ無ホク上イ并イ

(菩提)

304 「願共諸衆生生 往生安樂國國

*願——此ノ一行ナシ

305 「南無西方極樂化主大慈大悲阿彌陀仏 十念

*願——此ノ一行ナシ

306 「それ往生ワウシヤウカウエン講演タイシ「七門タイリヤク」大旨カク大略カクのことし

*七門——左傍補入

307 「抑ソモク われら無始ムシよりこのかた 生死シヤウシに流ル

我等 從 以來

今于 知 不

308 「轉テンしていまに出離シュツリの方法ハウホウをしらす

利益 已

(16)

309 「過去無量クワクムリヤウの諸佛シュフツのりやくにもすてに

漏

未

310 「もれ 現在ゲンサイ十方ハウの諸仏シュフツの教化ケウカクエにいまた

預

哀

哉

猶

311 「あつからず あはれなるかなや なを常没シヤウモツ

爲

恥

可

恥

悲

可

312 「の凡夫ホシフたる事 はつへしく かなしむへ

悲可

今

之

313 「しく しかるに幸サイワキにいま釋尊シヤクソンの遺ユイ

過

之

314 「教ケウにあふて 往生フシヤウ極樂ゴクラクの業ゴフを勤修コンシュす

何

之

如

315 「出離シュツリの要道ヨウダウ なに事かこれにしかむ

316 是 豈 之
「これあに大師釋尊の廣大の恩徳に

317 非 乎 之 依
「あらずや これによりて今日の結衆

318 各 以
「おのく至誠心をもて 釋迦大師を禮拜

319 讃嘆して 彌 之
「讃嘆して いよく往生淨土の業を成

320 就することをえむ 得矣 歌頌曰
「就することをえむ 頌曰

321 「敬禮天人 大覺尊 恒沙福智皆圓滿

322 「因圓果滿成 正覺 住壽凝然無去來

323 「南無大恩教主釋迦牟尼如來 二反 *

324 「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道

*二反—藏ナシ

326 「文永六年五月廿二とりのおはりに

327 「このしきかきをはりぬ かならずく

328 「一佛浄土の縁をむすはんとなり

330 「しつかにこの式を拜覽申候に ほん

(17) 331 「ふのつたなき事をのへかく時はいよく

332 「しやはをいとひ仏の難有體かたる時

333 「は 猶^ゝ浄土をねかひ候や ねかわくは

334 「此式拜見之力をもつて すみやかに

335 「九品^{*1}のはちす^{*2}の上に生まれむ

*1——見セ消テアリ
*2「す」——右傍補入

「南無阿みた仏くく 仏子尊然（花押）」

「南都興福寺東院之内 藤菊丸」